令和３年７月１８日（日）　東奥日報【２６面】

十二湖周辺 地滑り跡

弘大などのグループ確認

江戸中期に起きた大地震による地滑りで、川がせき止められてできたと伝えられる津軽国定公園の十二湖（深浦町）。弘前大学などの研究グループが、電気探査で湖周辺の地下構造を実際に調べ、大規模な地滑りが過去にあったことを確認した。湖ができた時期についても現在、放射性炭素を使った年代測定の結果を精査中で、十二湖誕生の秘密が科学的に解明される日が近づいている。（福士和久）

十二湖随一の美しさを見せる青池。弘大などの調査により、周辺で過去の地滑り跡が確認された（写真は2020年４月撮影）

湖誕生の秘密に肉薄

鄒青穎助教

調査したのは弘大農学生命科学部の鄒青穎助教（40）＝応用地形学＝ら。ほかに地質調査業の興和（新潟県）、岩手県の花巻市博物館、深浦町が参加した。

研究は、２０１５年に京都大から弘大に赴任した鄒助教が、地図で山の中に散在する十二湖を見て、湖のでき方に疑問を持ったのがきっかけ。地域振興に役立つ研究を支援する学部内のプロジェクトに応募し、19年５月に青池と鶏頭場の池の周辺の地質を調べた。

その結果、もともとあった岩盤の上に、全く違う質の層が積み重なっていることが判明。地形から、地滑りによって落ちてきた土砂と分かった。最も深い所で20～30㍍あった。

古文書の「弘前藩庁日記」によると、１７０４年５月27日に地震（宝永岩館地震）が発生。「山が崩れ沢が埋まり、水が流れなくなった」「小峰川の上流で崩落があった」などの記述があり、これが十二湖の誕生と一般的に捉えられてきた。ただ、湖ができた―との記載はない。

十二湖は世界自然遺産の白神山地の西側に位置し、青池など33の美しい湖沼で知られる。２０２０年の訪問客は28万５５０人。

鄒助教は「観光客へのアンケートによると、湖がどうやってできたか知りたいという人が多かった。アフターコロナに向け、この研究が観光振興に役立てば」と話している。

上記の画像は，当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。